共同研究プロジェクト「表象に関する総合的研究」

2008 年度第 3 回研究会

日時：2009 年 1 月 31 日、午後 1 時半より 6 時
場所：AA 研、小会議室

報告者とタイトル：
1. 小田　淳一氏（AA 研所員）
　「グループ μ の文彩モデルとその計量可能性」
2. 山内　志朗氏（AA 研共同研究員、慶応義塾大学）
　「情念と畳長性」

報告要旨

「グループ μ の文彩モデルとその計量可能性」

グループ μ の『一般修辞学』（1970）は、19 世紀末に死亡宣告を受けた修辞学が様々な分野で再評価されつつあった 20 世紀後半に発表されたが、同書が修辞学の再興に果たした役割は大まかに見て 2 つある。そのひとつは、提示されたモデルの見掛け上の斬新さにもかかわらず、それが古典修辞学の正統的な継承者であるということであり、もうひとつは、文彩の操作的価値に基づく当該モデルが情報科学、より具体的にはテクストの計量的な美学への接合可能性を示していることである。『一般修辞学』は、詩的事象とは或る規範状態からの規則的変形によって生じるものであるとして、伝統的な修辞学の個々の文彩を、テクスト構成要素のレヴェル（形態論、統辞論、意味論、論理）において、4 種の操作（削除、付加、削除－付加、置換）によって行われた 4 種の変換（形質変換、配列変換、意味素変換、論理変換）というマトリックスにおいて同定する。この文彩－変換法一覧は、「形式的構造の研究としての修辞学は必然的に超域修辞学へと拡張される」とグループ μ 自らが述べているように、少なくとも表現の次元では、修辞学が本来対象とする言語テクストのみならず、映像や音楽などの意味の転移を伴わないとされるテクストの分析にまで拡張可能なモデルであると言えよう。このモデルは要素の変形を最重要視するという点で、理論的には計量的分析と親和性を持つものであるが、最も実効的な適用のひとつは、或るテクスト単位中に 4 種の変換操作或いはその他の操作の痕跡を走査してそれらを計量的に記述することであり、本報告では今までに行われた試みについて幾つかの例（詩を中心とする言語テクストの微細な音韻構造、プロップ的な機能連鎖としての物語テクストの配列比較、旋律の 2 音間非対称隣接行列に基づく音楽テクストのネットワーク構造化など）を挙げた。このように、ミクロからマクロまでのレヴェルで行われた変換操作の痕跡としての要素間関係を多次元化したり、それらを可視化する試みは、美学におけるダイナミックな

視座を提供するものと思われる。また、科学的分析に不可欠な事象の再現性については、テクスト生成のシミュレーションが分析モデルの有効性を問う契機となるが、その際に、美学的表現機能を数学的に記述する試みが可能となればそれは、初期のニーチェが断片的ながら予見した数理美学を実践的に例証する作業ともなろう。

（小田　淳一）

「情念と畳長性」

情念（情動・情態）は多様に用いられるが、思想史においては、ストア学派が情念を克服する境地をアパテイアと名付け、情念（パトス）を倫理学における敵として位置づけて以来、積極的に評価されることは少なくなったようである。

もちろん、情念をめぐる評価の枠組みは様々あるのだが、ここでは、情念を評価する概念枠として「畳長性」を提出し、その視点から情念の評価をめぐる視点を考えたい。

予め問題の概要を述べておけば、ジェームズ=ランゲ説においては「悲しいから泣くのではない、泣くから悲しいのだ」という整理がなされていた。感情と表現のどちらが先立つのかと言うことである。泣くことと悲しいことのどちらか先立つのかという問題設定は、素朴すぎるのであるが、少なくとも「悲しい」という感情が先立つものではないと言うことは確認できると思う。

感情は決して心の状態に留まるものではないことは重要な点だ。おそらく、感情(feeling)と情念・情動(emotion)を分けることは重要な論点となる。情念の方はギリシア以来、パトスとされ、ストア派は、パトスの克服にこそ倫理学の理想をおいた。そして、賢人はパトスを持たないとされたのである。パトスとして挙げられるのは、恐怖、欲望、怒りといったもので、賢人であろうと経験するものであると思われるが、それを非理性的なものとして、賢人は経験しないとするのはなにやら、パトス概念特有の事情があるのかもしれない。

パトスの理解については、古代においても、プラトン、ポセイドニオス、アリストテレス、ゼノン、クリュシッポス、ガレノス、キケロ、セネカなどなど主立ったものでも多数あり、また、中世に入っても、アウグスティヌス、トマス・アクィナス、オッカムなどなど、一通りに整理できるものではない。そして、中世についてはほとんど研究が進んでいないのが現状である。

また、近世にはいって、デカルトの情念論は生理学的な視点からの情念論としてしばしば言及されるが、それが中世の情念論とどのような関係があり、ホッブズ、スピノザ、ヒュームの情念論、アダム・スミスやスコットランド常識学派などとの関係となるとほとんど手が付けられていない状況である。

最近、脳科学の視点から情念が論じられることも多くなったが、多くは情念・情動の神経学的研究は１７世紀のデカルトにまで遡るとし、それ以降の歴史に触れる程度の整理が多い。

近世以前のものとなると、ガレノスなどが有名であっても、それ以外となると手の出しようがない。ただし、最近は哲学史の中で研究が進みつつある。古代については、マーサ・

ヌスバウムの研究がある(Martha C. Nussbaum、 *The Therapy of Desire: Theory and Practice in Hellenistic Ethics*、 Princeton UP、 1994、 *Upheaval of Thought: The Intelligence of Emotions*、 Cambridge UP、 2001)。

現代の大脳生理学的な情念論が、哲学的情念論と関わるところとしては以下の諸点が挙げられる。

（1）情念と感情が異なるということは、情念が身体状態を含んでいることにある。情念は内的感情とは異なる。

（2）情念は単なる受動状態ではない。情念を理性・知性によって一部を制御することはできるとしても、ストア派が考えたように、賢者になれば情念を免れられるということはない。ヨガの達人になれば話は別。

（3）情念の座が心臓であるというのは、情念が心的状態とはほぼ独立に生じることである。これは現在の大脳生理学的情念論と対応し合う。

（4）情念とは、判断でも、判断に随伴するものでも、判断の原因でもなく、判断に平行して生じる現象系なのである。両者は相互に弱い相互作用を行いながら、補正しあう。両者は、平行随伴現象系をなすと述べてもよいかもしれない。そしてこのことこそ、情念が「畳長性」をなすということなのである。

以上の点を踏まえ、情念論を分類すると

1)ギリシア的情念論（プラトン、アリストテレス、クリュシッポス、ガレノス、キケロ）

2)スコラ的情念論（アウグスティヌス、トマス・アクィナス）

3)近代的情念論(デカルト、スピノザ、ホッブズ)

4)大脳生理学的情念論（ザイアンス、ラザラス、ダマシオ、ルドゥー）

と 4 つに大別できるだろう。

トマスの情念論は、主知主義的であり、身体との関連のもとに情念論が構築されているのではなく、あくまで目的への意志的行為として、認知作用を前提としての情念論であり、古代において顕著であった、生理学、身体論との結びつきは希薄である。

この発表では、トマス・アクィナスの情念論が『神学大全』の第 2 部における議論を概観し、古代の情念論との差異、近世以降の情念論との差異を取り出した。トマスの情念論の特徴として、身体性の欠如が挙げられる。その背景について今回の発表で検討を行った。

（山内　志朗）